

創作に注目した「身体表現教育」の実践とその効果 ：ダンスを専門としない大学生を対象として

Developing and testing an undergraduate educational program for non-dance-majors to foster creative physical expression

中野 優子[†], 清水大地[‡], 岡田 猛[‡]

Yuko Nakano, Daichi Shimizu, Takeshi Okada

[†]東京大学大学院学際情報学府, [‡]東京大学大学院教育学研究科

Graduate School of Interdisciplinary Information Studies/Graduate School of Education, The University of Tokyo
nakanoyuko89@gmail.com, daichi@p.u-tokyo.ac.jp, okadatak@p.u-tokyo.ac.jp,

Abstract

In this study, based on our previous practices ([1][2]), in collaboration with a professional dancer, we designed a dance course focused on the creation process for non-dance majors. We analyzed its educational effects using four types of data: students' response papers, evaluations of students' physical expression, questionnaires administered before and after the course, and students' final reports. The results show that the dance course improved various aspects of the undergraduates' awareness (e.g., characteristic features of themselves and other students, and the relationship with other students), and their communication patterns. We discuss how the design of this dance course can be applied to various participants.

Keywords — Artistic expressive education, Artistic creation, Physical expression, Dance, University education

1. はじめに

身体表現を創作するという経験は大学生にどのような変化をもたらすのだろうか。また、それらの変化を効果的にもたらすための授業はどのようにデザイン・実施されると良いのだろうか。

近年、「身体」や「身体活動」が注目され、関連した様々な研究や教育的試みを実施されつつある。そもそも身体的重要性に関しては、例えば Damasio[3]が心身二元論への反論として取り上げたのを契機として、身体認知への影響を検討した身体性認知（例えば[4]）の重要性や、ジェスチャーなどの非言語コミュニケーションの重要性[5]などが指摘されてきた。そのような「身体」を用いる様々な活動を考えると、スポーツ、芸術表現（演劇、音楽、ダンス）、日常生活、などが挙げられ、人間の活動はすべて身体を伴っている、と主張することも出来よう。そこで本研究では、様々な活動の中でもとりわけ、ダンスを創作するという活動に注目する。「身体」を基にして考えたり、表現したりするダンス創作という活動には、自分自身の思いや感情やイメージを身体活動を通して他者に伝えたり、

身体感覚に基づいて自分自身や他者と深く関わり合ったり[6]、普段の言語的なコミュニケーションとは異なるコミュニケーションの在り方に触れたり、ダンスの文化そのものに参加したりといった、様々な教育的可能性が秘められていると考えられる。教育の領域では、創造的教養人[7]として生涯にわたって能動的に芸術文化に触れていく力や、21世紀型スキル[8]のように自ら新しい考えを生み出す創造力や他者と協働活動を行っていく能力の重要性が主張され始めているが、これはダンス表現教育の持つ教育的可能性と重なるところが大きいだろう。以上のことを踏まえると、ダンスの創作活動を体験することは、ダンスの専門家を目指さない学生・社会人にとっても大きな意味があると考えられるだろう。特に、大学教育では、これまで行われてきた教養教育の見直しの中で、情動や身体を介した表現活動・創造活動に取り組むことの必要性が主張されてきているにも関わらず、その実践はほとんど行われていないのが現状である[9]。

そこで、本研究では、ダンスアーティストの美木マサオ氏と協働で、ダンスを専門としない大学生を対象に、創作に注目したダンスの授業をデザイン・実施し、その教育的効果を多様な観点から測定した。

1. 1. ダンス創作において必要とされる要素

創作に注目したダンスの授業をデザインするにあたり、以下ではまずそもそもダンスを創作するとはどのようなプロセスで営まれるのか、その結果として創作を行う人にはどのような変化が生じるのかを検討することで、授業で何をどのように教えるべきか、その要点について導出する。

ダンスとは、「時間と空間において、目的的、意図的かつリズムミカルで文化的に影響された身体運動や静止の連続によって構成された人間の行為」[10]と定義されているように、身体を媒体として、ある時間と空間において、伝えたいことを表現するといった特徴を持

つ芸術表現である。即ち、1) 内的なものを、2) 身体を通して表現し、3) 誰かに伝えるという構造がダンスの特徴であるといえよう[6]。とすると、ダンス創作の本質的要素は、1) 内的表象の形成、2) 身体運動の形成、3) 他者への伝達であると考えられる。では、実際の創作活動は、これらの要素がどのように機能することで営まれていくのだろうか。以下では、その具体的なプロセスに着目した。

1. 2. ダンスの創作プロセス

美術や演劇、ダンスといった多様な表現領域を対象に、その創作プロセスを検討している岡田[11]は、様々な先行理論を統合して芸術表現プロセスのモデルを提案している。そのモデルでは、芸術創作は、芸術領域との関わりの中で、「知覚と行為のサイクル」と「行為と省察のサイクル」が繰り返されることで展開すると主張されている。このモデルに基づいて考えると、ダンス創作は、ダンス領域をはじめとした様々な領域の文化との関わり（特に、上演芸術としてのダンスの特性から観客や共演者といった他者や、音楽や空間といった環境との関わり[12]）の中で、「知覚と行為のサイクル」と「行為と省察のサイクル」という2つのサイクルが繰り返されることで展開すると考えられる（図1）。具体的には、作品のコンセプトや知識といった様々な事柄についての長期記憶から具体的なコンセプトやアイデア、感情、イメージといった内的表象が形成される。これがダンス創作の本質的要素の1つである内的表象の形成である。その形成した内的表象を、運動神経系や筋肉・関節などによる身体運動制御などを通して実際に身体行為としてある環境の中で表す。これがダンス創作の本質的要素の2つ目である身体運動の形成と関わってくる。実際に運動としてある環境において行為が行われると（本質的要素の3つ目である他者への伝達）、環境や他者からフィードバックが返ってくる。それを積極的に知覚し、省察したりしながら内的表象を形成し直し、その内的表象に基づいて、更なる運動が生成されるというサイクルが繰り返されていくことで、ダンスは創作されると考えられる。もちろん、サイクルの始まりが内的表象の形成ではなく、まず運動が生み出されて、それを環境の中で行うことで返ってきたフィードバックにより内的表象が形成されていくという場合もあり得るだろう。

まとめると、ダンス創作はダンス領域を始めとしたさまざまな領域の文化との関わり、観客や共演者といった他者や環境との関わりの中で、「知覚と行為のサイ

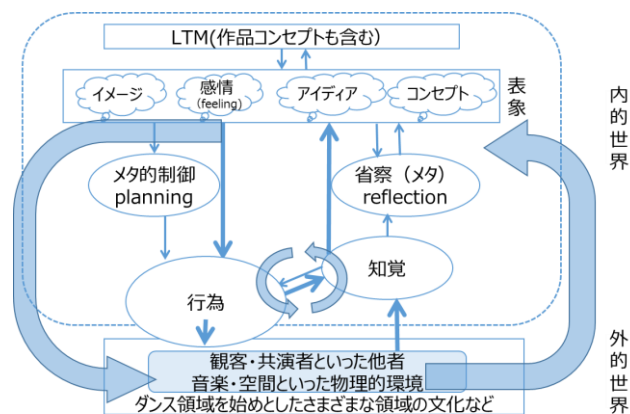


図1 岡田(2013)をもとに作成したダンス創作プロセスのモデル

クル」と「行為と省察のサイクル」が繰り返されていくことで展開する。その際、ダンスの本質的要素である1) 内的表象の形成、2) 身体運動の形成、3) 他者への伝達が相互に関わり合うことで上述のダンス創作のプロセスは営まれていると考えられる。

1. 3. 創作者に起こりうる変化

上述のようにダンス創作のプロセスが展開されるとすると、それを行う創作者にはどのような変化が生じるだろうか。例えば自分の内的表象や知覚したことに對して省察したり、それをメタ的に制御して身体行為を行う際に、自分自身のイメージやアイデア、感情といった内的表象や身体行為について意識し自覚的になることで、自分自身の身体的、内的特性へ気づきが生じる。またある環境の中で他者に対して自分の身体表現を発信したり、他者からのフィードバックを得たりしながら知覚と行為、行為と省察のサイクルを展開させるということは、外的世界に注意を向けて、意識的に関わることを意味し、その結果、他者の身体的・内的特性への気づきや環境への気づき、自分と外的世界（他者や環境）との相互作用や関係性に対する気づきが生じる可能性がある。更に他者との積極的な関わり合いが円滑に行われるということは、同時にコミュニケーションが促進されることにもつながるであろう。このように創作者には、様々な気づきやコミュニケーションの促進といった変化が生じうると考えられる。

以上を考慮すると、創作に注目したダンスの授業は、内的表象の形成、身体運動の形成、他者への伝達といったダンスの本質的要素を体験するために、学習者の中で「知覚と行為」「行為と省察」のサイクルが、多様な外的世界との関わりの中で活発かつ効果的に繰り返されるようにデザインされるべきであろう。

1. 4. 創作に注目したダンス教育の目標

上述したように、現代社会では身体への関心の高ま

りとともに、生涯、芸術をはじめとした文化に能動的に親しんでいけるような力（創造的教養[7]）や、現状をきちんと理解するだけでなく、他者と協働で現状から新しいアイデアや考えを自ら創出していく力（21世紀型スキル[8]）が求められている。更に、特に大学教育に関しては、情動や身体を介しての創造活動の必要性が主張されている[9]。以上の現在の教育・大学教育で目指されていること、そして上述したダンス創作の際に創作者に起こりうる変化を考慮し、本研究では教育目標を以下の2点に設定した。1点目は、自分・他者・環境について、多様な見方・観点を通して接し、積極的に新たな気づきを得る力を促進すること、2点目は、他者とのコミュニケーションを促進することである。

1. 5. 教育プログラムのデザインの指針

上述したダンス創作のプロセスを教育プログラムとして具体的にデザインしていく上で、どのような指針を設けると良いのか。中野・岡田[13]の熟達したダンサーの振付創作についての実証的な研究によると、熟達したダンサーは、確かにモデルにあるような実に様々な対象（自分の身体やイメージといった内的表象や、音楽や空間といった環境、他者など外的なもの）に積極的に注意を向け、省察することでダンスを生み出す際の着想を得ること、その着想を様々な身体運動の観点（空間的側面や時間的側面）を利用することで実際にダンスとなって現れる身体運動を生成し、その運動に注意を向け更なる着想の観点を得て、再び動きを生み出していき、といった認知過程と身体過程を複雑に関わり合わせ、それを繰り返しながら、ダンス創作を営んでいた。岡田[11]のモデルとこの知見を基に、中野・岡田[1]やNakano, Shimizu, & Okada[2]におけるダンス教育プログラムのデザインでは、教育的介入の観点として、様々な対象を積極的に知覚・省察することと、その省察に基づいて行為を生み出すということ、更に他者とのインタラクションを促進することを重視していた。これら2回の実践からは、他者とのインタラクションや協働作業に困難さと面白さを感じる参加者が多かったため、本研究では、上述した教育的介入の観点の中でも、他者や環境という外界とのインタラクションを積極的に促進する、という点を強調して教育プログラムをデザインした。

1. 6. 教育効果の測定

新たな教育プログラムを開発する際、実践の教育効果は様々な観点から測定される必要がある [14]。本研

究の教育目標は、ダンスの創作を体験することを通して、受講生の様々な気づきや、コミュニケーションを促進することである。この目標が達成されたかどうかを、本研究では、授業中と授業後の変化の2つの側面から捉える。まず、授業時に受講生が自分や他者に注意を向けて多様な観点から捉えることができるようになったのか、それを受けて他者との関係の中で身体運動を工夫して表現することができるようになったのかについて、受講生自身の認識と専門家の評価から検討する。

次にそのような授業でのプロセスを経て、結果としてどのような変化が起こったのかについて検討する。変化については、これまでの著者らの実践 ([1][2])と同様に授業前後の質問紙で、身体表現活動を通して受講者のダンスや表現活動、日常生活における意識がどのように変化したのかについて検討する。更に、気づきに焦点をあて、具体的に授業で印象に残った体験と、そこで起こった気づきの内容の詳細を捉えるために、授業後に課題として提出されたレポートの内容について分析を行った。

1. 7. 本研究の目的

ここまでの内容を考慮し、本研究では、創作に着目したダンスの授業を、他者や環境との関わり合いを重視した設定の下、デザイン・実施し、その教育効果を授業中に生じた変化と授業後に生じた変化、という2つの側面から実証的に検討することを目的とした。

2. 方法

以下で、実際に行われた授業の概要とそのデザイン、また教育効果の検討方法について述べる。

2. 1. 授業の概要とデザイン

授業は東京大学教育学部において「身体表現の創作」という講義名で、2016年1月18日から22日までの5日間、集中講義として実施された。講師はダンスアーティストの美木マサオ氏であり、学部3、4年生を中心に9名（男性：5名、女性：4名）が参加した。授業の目的は、上記の教育目標等を踏まえ、「他者との関わりの中から自分について気づきを得ること」と設定した。

授業を担当した美木マサオ氏は、舞台等の作品創作活動と、様々な人を対象としたワークショップ活動の両方を16年にわたり、多数行ってきた現役のエキスパートの芸術家である。また、「機能の解体と再構築」という創作ビジョンのもと、他者や環境（特にモノや人工物）との関係を捉え直すことでダンス作品を生み出

表1 授業の概要

授業	目的	内容	調査
1日目	物事を多角的に捉える	環境(モノ)と積極的にかかわることでダンスを創作する(例: サボテンと踊る)	質問紙調査(事前調査), エアー, コメントシート
2日目	他者からのフィードバックを積極的に利用しながら自らの表現を創作する	他者との関わりからダンスを創作する(例: 他者のためのダンスを創作する)	↓
3日目	環境(モノ)と他者の両者と関わることでダンスを創作する	少人数に分かれて、グループごとにモノとも関わりながらダンスを創作する	
4日目	構成	3日目までにやったことを組み合わせて一つの作品を構成する。	↓
5日目	発表	作品の発表	
1~2週間後			質問紙調査(事前調査) レポート

したり、そのような自身の創作プロセスを体験させる教育活動を広く行っている[15]。これらのことから、本研究におけるダンスの文化と創作活動を体験させる授業の実践担当者としてふさわしいと考えられた。

授業に関しては、美木氏と議論を重ねつつ、デザインを行う際の指針に基づいて計画を立てた。5日間の授業概要とそのねらいを表1に示す。教育目標である外界とのインタラクションを効果的に体験することができるよう、様々な対象と段階的に関わりを深めていけるよう授業内容を設定した。1日目は、今ここにある物事を多角的に捉えるという観点を養うために、環境と積極的に関わり合うことでダンスを創作するという活動を主に行った。今回の授業では、初学者の大学生が対象として関わりやすいように、環境の中でもモノに焦点を当てた。具体的には、脚立やヘルメット、サボテンといったモノを用意し、受講生がそれぞれに好きなモノを選び、そのモノを様々な観点から注意深く観察して、そのモノとの関係性からソロのダンスを創作した。多角的にモノを観察する際の観点については、講師が手本を示した。2日目は、他者からのフィードバックを積極的に利用しながら自らの表現を創っていくということを体験させるために、他者との関係性の中から動きを生み出す活動や、他者の特徴を様々な観点から捉え、他者のためのダンスを創作するという活動を中心に行った。3日目は、モノ(環境)と他者の両者と関わりながらダンスを創作するという活動を行った。また、授業日後半の作品創作に向けて、1人1人が表現者であるという意識を促すために、講師にパフォーマンスを行ってもらい、そのパフォーマンスについて批判させるという活動も行った。4日目は3日目までに体験した活動を組み合わせて全員で1つの作品を構成していくということが行われた。5日目は、構成された作品を、文脈を共有していない他者に伝えるということを体験させるために、授業と関わりのない外部の人を観客として招待し、発表する発表会が行われた。発表された作品のタイトルは「each position」

(約40分)であった。

なお、これらの授業デザインは、講師と第一著者、第二著者の三名で授業が実際に開始される1年前から定期的にミーティングを実施し、議論を行った上で決定された。

2. 2. 教育効果についての検討方法

授業の教育効果については、以下の4つの方法を用いて、多角的に検討した。まずは、1)各授業回における認知的な変化を具体的に捉えるためのコメントシート(1回の授業ごとに提出)、2)受講生の身体表現の変化を捉えるための特定のワーク(エアー)におけるパフォーマンス評価(ワーク自体は、1回の授業ごとに実施)、3)授業前後での表現活動・日常生活に関する認知的変化を捉える質問紙(初日の授業開始時と最終日の発表会後に実施)、4)受講生が得た気づきの具体的な内容と、それを引き起こした体験について検討するための受講生のレポート(全授業終了後2週間以内に提出)の合計4点である。以下詳述する。

2. 2. 1 授業ごとのコメントシート

授業時に受講生が自分や他者に注意を向けるようになったか、それを受けて他者との関係の中で身体運動を工夫して表現することができるようになったのか、受講生の認識について検討した。毎回の授業後に全13項目の質問項目(5件法;1:全くそう思わない~5:そう思う)と6項目の自由記述を含むコメントシートを配布し、それを次回の授業の冒頭で回収した。5件法による質問項目を表2に示す。

分析においては、今回は5件法による質問項目のみを利用し、全5日間の授業を通した変化をその平均値から検討した。

2. 2. 2. エキスパートによる評価

受講者の身体表現は、エキスパートから見ても、他者を多様な観点から捉え、それを受けて身体表現を工夫できるようになっていたのか。ここでは、授業に参加することで生じた受講者の身体表現の変化に対して、連日実施されたワークを対象にし、「他者を多様な観点



図2 「エアー」を行う受講生

から捉えられていたか」「他者との関係において身体の動きを工夫できていたか」という観点からエキスパートに評定を行ってもらい検討した。対象としたワークは、「エアー」[16]という複数名の他者と協働で1つの身体表現を即興的に創作していくワークである(図2)。分析では、2日目から5日目に行われたこのワークでの参加者の表現の質について、エキスパートによる評定を行い、時期を通じた変化を検討した。(1日目に関しては、講師も共に参加し、表現を行ったため、分析からは除外した。)

「エアー」では、受講生が4~5人のグループに分かれ、円になって立ち、少しずつ身体を様々に動かしたり、様々な声を出したりしながら、お互いを感じて動いていく。他者に対して即興的に身体運動や声を用いて反応し合うことで、グループ全員で1つの身体表現を創発させていくワークである。毎回の所要時間はグループによって若干異なるものの、5分程度であった。

このワークについて、授業に携わっていない2名の熟達したコンテンポラリーダンサー(経験年数11年, 20年)に評定を依頼した。2名のダンサーは、講師の美木氏、ワーク考案者の香瑠鼓氏の活動に長期間関わってきた経験を有しており(美木氏: 5年, 10年; 香瑠鼓氏: 5年, 13年)、このワークについての評価基準を共有していると考えられる。評価の手続きとしては、まず全グループの映像を1度通して見てもらった上で、再度映像を見ながら、グループごとに1)グループ全体の評定、2)グループ内の個人の評定を行ってもらった¹。評定項目を表3に示す。これらの項目を全てのグループ、全ての個人について、7件法(1:まったくそう思わない~7:とてもそう思う)により評価してもらった。なお、これらの評価項目の内容については、このワークの経験を豊富に有する第一著者が、考案者である香瑠鼓氏と議論の上作成し、第二著者と協議し修正した上で、講師の美木氏に確認し、作成した。

¹ グループの提示順については、評定者ごとにランダム化し、実施時期が分からないようにしたうえで提示した。

2. 2. 3 授業前後の質問紙

5日間の授業を受けた結果として、受講生にどのような認知的な変化が生じたのかを捉えるために、授業期間の前後(初日の授業開始時と、最終日の発表後)に受講生9名を対象に質問紙調査を実施した。質問項目については、中野・岡田[1]を参考にして作成したNakano, Shimizu, & Okada[2]と同様の、「表現活動に関する興味や他者との関係性」と「日常生活におけるものの捉え方や他者との関係性」を問う全35項目であった。

分析は、1)欠損値の補完、2)授業実施前後における各因子得点の変化の検討(Nakano, Shimizu, & Okada[2]の因子構造をそのまま利用)、という手順で進められた。各分析の詳細は、結果において後述する。

2. 2. 4 レポート

受講生に生じた気づきの詳細な内容を捉えるために、授業の中でどのような体験から、どのような気づきを引き起こされたのかについて受講生が授業終了後に書いたレポートを分析対象として、検討を行った。レポートは、様々な質問項目に対して自由記述形式で回答を求めたものであったが、分析の目的から「授業についての感想」と「授業を受けてからレポートを書くまでの間に、授業での体験が日々の生活にどのように影響したか」という2つの項目についての回答を分析対象とした。

分析は、1)回答の区切り、2)該当する回答の抽出、3)カテゴリの生成、という3つの手順で行われた。まず、意味内容に基づいて回答をセグメントに区切った。次にその区切られた回答について、「気づきを引き起こした体験」と「気づきの内容」に関係したもののみを抽出し、最後にそれぞれに関する回答をまとめて、ボトムアップにカテゴリを作成した。分析のすべての段階は、第一著者と第二著者の協議により進められた。

3. 授業実施による教育効果

3. 1. 授業ごとのコメントシート

授業時に受講生が自分や他者に注意を向けるようになったか、それを受けて他者との関係の中で身体運動を工夫して表現することができるようになったのか、受講生の認識について、授業1回ごとに尋ねたコメントシートを分析対象として検討した。結果を図3に示す。まず項目1,2の自分自身への意識については、いずれの項目も平均点が3.8以上と高く、受講生が授業の5日間を通して、自分自身のイメージや感情、アイ

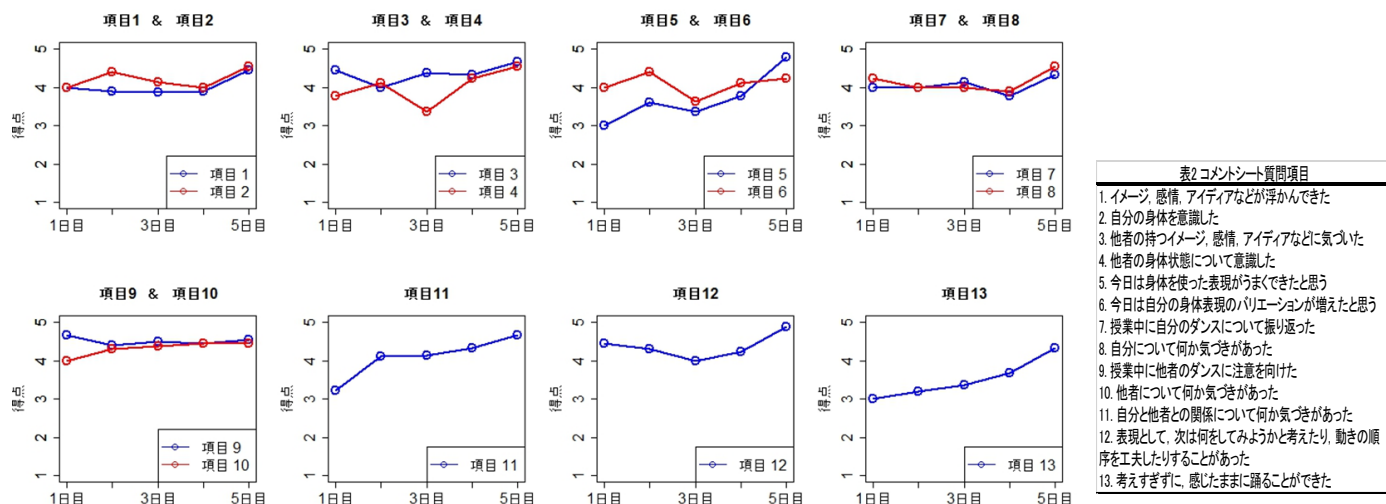


図3 コメントシート分析の結果

ディア，身体に終始注意を向けている様子が窺える．特に項目2の身体に関しては，平均点が4以上と終始高く，受講生が授業を通して特に自分の身体を意識していたことが示唆された．

次に，項目3,4の他者に関しては，項目3の平均点が終始4以上であるという結果から，授業期間を通じて，受講生は他者のイメージや感情，アイデアを常に意識している様子が窺われた．一方で，他者の身体状態への意識（項目4）は，3日目で下がり（3.38），最終日に向かって再び上がっていく様子が見られた．これは3日目に，多様な観点から他者や環境と関わっていく中で，並行して身体運動を生み出していくことに困難が生じたためだと考えられる．確かに受講生のコメントシートにおける自由記述を見ても，印象に残った出来事として「エアーがうまく展開できなかった」と受講生の一人が述べているように，他者に関わるワークについて苦心している様子が見受けられた．これは，1日目，2日目とダンス創作の体験を重ね，活動に慣れてきたためにかえって様々なことを意識しすぎたためと，更に，3日目の授業内容が環境と他者の両方に注意を向けながらダンスを創作するという複雑な内容であったことも影響して，他者の身体状態に対して，どのように自身の身体で反応したらよいのか，迷いが生じてしまい，グループ内での反応が停滞していたためと考えられる．実際，「意識しすぎて動きづらくなった」，「他の人の動きを感じるのが難しい」といったコメントも見られた．よって，上記の理由から，3日目に，他者の身体状態を意識できなかったと感じた人が多かったであろう．一方で，他者についての気づき（項目10）は終始4.3以上と，授業期間を通じて，

高い状態を維持している様子が見られた．また，自分と他者の関係性への気づき（項目11）は，授業初日は平均点が3.2と比較的低い状態から，授業を経るごとに徐々に上がっていく様子が見られた．これらの変化には，他者と多様な観点から関わり合えるように，初日はモノを多様な観点から捉え直すことから始めて，徐々に他者との関わりを濃密にしていって授業デザインが深く関係していると考えられよう．受講生は授業を通して自分や他者に積極的に意識を向けながら身体表現を行った結果，自分自身や他者，自分と他者の関係性に対して何らかの気づきを得ていたのだと考えられる．また，「身体でよく表現できたと思う」という項目5に関しても，授業後半になるにつれて徐々に得点が上昇しており，注意を向けたことについて身体表現としての的確に表現できるようになったと受講生自身が認識していった様子が見える．

以上のように，受講生は授業が展開するにつれて，ある側面に困難を感じながらも，自分や他者により注意を向けるようになり，身体運動を工夫して表現できるようになっていったと認識していたことが示された．

3. 2. エキスパートによるパフォーマンス評価

受講生の身体表現の質はエキスパートの観点からも授業を通して変化していったのだろうか．まず，グループの結果を図4に示す．図からわかるように，身体運動の側面，声の側面，空間の側面いずれに関しても，授業前半（2日目，3日目）よりも後半（4日目，5日目）に高くなっていく様子が見られた．このことから，グループ全体としては，お互いにメンバーの身体の動きや空間の使い方，声などを多様な観点から捉えること，そしてそれらを考慮し，身体の動きや空間の使い

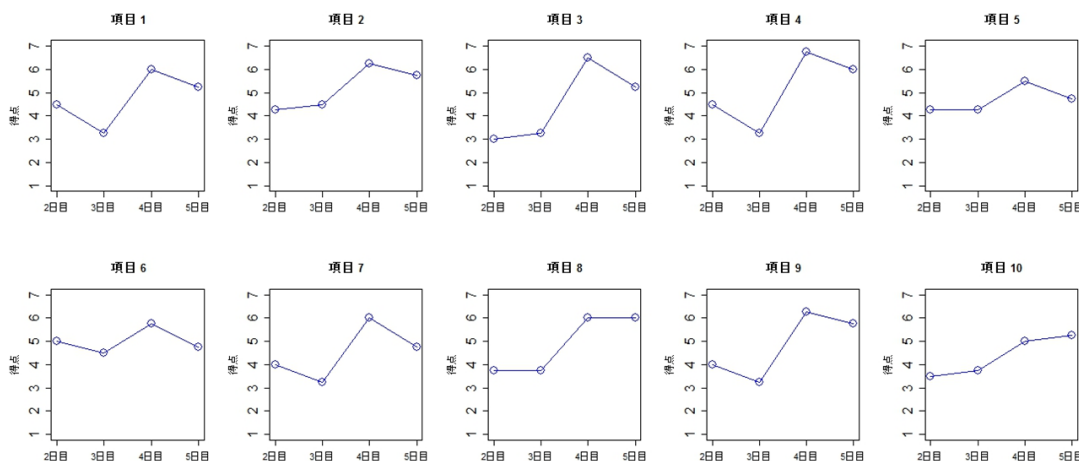


図4 エキスパート評価の結果(グループ)

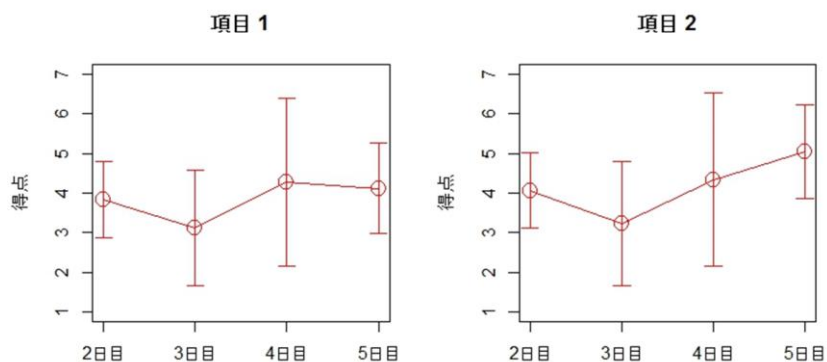


図5 エキスパート評価の結果(個人)

表3 評価項目	
グループ	
1	他者の身体の動きを多様な側面から捉える
2	身体の動きを工夫する
3	他者の空間の使い方を多様な側面から捉える
4	空間の使い方の工夫
5	他者の声の使い方を多様な側面から捉える
6	声の使い方の工夫
7	他者の身体の動き、空間の使い方、声の使い方を多様な側面から捉える
8	身体の動き、空間の使い方、声の使い方の工夫
9	グループとしての作品の良さ
10	評定者の作品に対する好み
個人	
1	他者の身体の動きや空間の使い方、声を多様な観点から捉える
2	他者との関係において身体の動きや空間の使い方、声を工夫できていたか

方、声を工夫して表現することが出来るようになったと言えよう。他者と積極的に関わることが授業の主な活動内容であったことと、その中でも更に、発表会に向けて個人個人というよりはグループで1つの作品を創ったという活動を行ったため、グループ全体としては、他者を多様な観点から捉えて、その捉えたことを実際に表現として具現化することができるようになったと考えられる。

次に、個人に関する結果を図5に示す。図5から、項目1(他者の身体の動きや空間の使い方、声を多様な観点から捉えることが出来ているか)、項目2(身体の動きや空間の使い方、声を工夫出来ているか)、共に4日目、5日目に評価が高くなっていることが分かる。実際に分散分析と多重比較により検定を行ったところ、項目1において2日目と4日目、3日目と4日目に差異が見られたこと(分散分析: $F(3, 21) = 4.74, p = .011$, 多重比較: $p = .009, p = .057$)、また項目2において2日目と5日目、3日目と4日目、3日目と5日目に差異が見られたこと(分散分析: $F(3, 21) = 5.52, p = .006$, 多重比較: $p = .047, p = .047, p = .014$)が示唆された。これらの結果から、個人に関してもグループと同様に授業前半(2日目、3日目)よりも後半(4日目、5日目)

において、他者について様々な観点から捉えることと、他者との関係において身体運動を工夫することができるようになっていたと考えられる。これは、上記した他者と積極的に関わる活動を行ったことに加え、他者との関わりを通して自分の特性について気づきを得られるように、他者からフィードバックをもらう時間を積極的に設けたり、一人一人が表現者であるということに自覚してもらうために、講師のパフォーマンスを批判する時間や、少人数で講師と対等に踊り合うという活動を行ったことも関係していると考えられる。このように受講者一人一人が、個性を持った表現者として、対等に刺激し合うことで最終日の発表会に向けての創作活動が営まれた。その結果として、グループ全体としてだけでなく個人個人の表現としても、授業前半よりも後半の方で評価が高くなったと考えられる。

以上の結果から、エキスパートの観点からも、授業を体験することによって、授業前半よりも後半の方が、他者との関わりという観点からみたグループとしての受講生の身体表現そのものが良くなる様子が見られた。また個人に関しても、捉え方に関しては若干の変動が見られるものの、特に実際に身体表現に工夫ができていたかどうかという点に関して得点が上昇した。

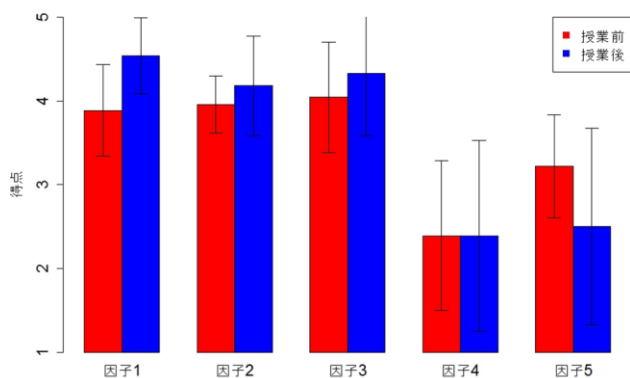


図6 授業前・授業後の因子得点

では、こういった授業のプロセスを経た結果、受講生の認知的な側面はどのように変化したのだろうか。

3. 3. 授業前後の質問紙

同様の質問紙を用いた Nakano, Shimizu, & Okada[2]では探索的因子分析の結果、5因子構造が抽出されていた。ここでは、この結果を参考にし、それらの5因子の得点が授業参加前後に変化したかどうかを、受講生9名のデータを用いて検討した(図6)。対応のある t 検定を行ったところ、因子1が $t(8)=2.9$, $p < 0.02$, $d=0.97$, [0.13:1.17], 因子2が $t(8)=1.61$, $p < 0.15$, $d=0.54$, [-0.10:0.54], 因子3が $t(8)=1.8$, $p < 0.11$, $d=0.6$, [-0.08:0.66], 因子4が $t(8)=0$, $p < 1$, $d=0$, [-1.36:1.36], 因子5が $t(8)=1.53$, $p < 0.16$, $d=0.51$, [-1.81:0.37]という結果が示唆された。9名とサンプル数は少ないものの、因子1において統計的に有意な差がみられた。また因子2, 3, 5においては統計的に有意な差は見られなかったものの、中程度に近い一定の効果量が示された(豊田[17]を参照)これらの結果から、授業を通して受講生の表現活動・創作活動への興味・思いが増したことが、ダンスを行う際に他者との関わり方により注目するようになったこと、自己主張の必要性への認識が下がり、日常生活における自分自身や他者の感情や身体への注目が増加したことが分かる。次節では、このような変化の中でも、特に教育目標である自分自身や他者への「気づき」に焦点を絞り、レポートの分析を行う。

3. 4 レポート

授業終了後のレポートの分析により、受講生は授業の内容の中でも具体的にどのような「体験」から、どのような「気づき」を得たのかについて検討した。作成されたカテゴリと回答を分類した結果を表4(体験)、表5(気づき)に示す。

体験に関していえば、「他者と関わり合うことで動きを生み出す体験」(9人中7人)や「物事を多角的に見る体験」(9人中5人)、「協働で1つの作品を創作する体験」(9人中4人)が最も多く言及され、他者との関わりを積極的に行ったり、モノを多角的に観察したりすること、そして他者と協働で身体表現を生み出すことといった、今回の授業で指針として重視して設定した内容が、受講生の中で体験として印象に残っているようであった。

またその体験から、受講生は「自分自身に対する気づき」、「他者に対する気づき」、「他者と関わることにに対する気づき」、「日常生活に対する気づき」、「芸術表現に対する気づき」といった実に様々な気づきを得ていた。その中でも特に「自分自身に対する気づき」である「自分の特性」(9人中7人)、「他者と関わることにに対する気づき」である「相互作用の面白さ」(9人中5人)、「場を共有することへの面白さ」(9人中5人)をはじめとしたカテゴリが多く言及されており、受講生が他者との関わり合いの中で、その関わり合いそのものに対する面白さに気づいたり、その相互作用を活発にするための要素である全員で一つの場を共有するという感覚の面白さを体感していたり、そのような他者との関係性の中における自分自身の個性や役割といった自分の特性に対して認識を深めている様子が伺えた。このように授業を通して受講生は多様な観点に関する気づきを得ていた。また、それらの内容を統合して考えると、他者とのやり取りや協働活動により注意や興味を抱くようになっており、コミュニケーションが促進されたと主張することも出来るだろう。

4. 総合考察

本研究では、ダンスを専門としない大学生を対象として、創作に注目したダンスの授業をデザイン・実施し、その教育効果を多様な観点から測定した。なお、授業のデザイン・実施に関しては、著者らがこれまで積み重ねてきた実践([1][2])を考慮しつつ、ダンスアーティストの美木マサオ氏と協働で取り組み、今回は、ダンスを通して、特に他者や環境といった外的世界との関わり合いを活発に行うことを強調した。また、授業の教育効果について、質問紙や授業の感想やレポート、授業時のダンスパフォーマンスといった多様な観点から検討した結果、ダンスの創作に取り組む経験を通して、受講生には自分や他者、そしてその関係性といった様々な点に気づきや変化が起こり、コミュニケ

表4 気づきを引き起こした体験

番号	カテゴリー	定義	a	b	c	d	e	f	g	h	i	total(人)
1	他者と関わり合うことで動きを生み出す体験	他者とインタラクションを行う中でダンスを生み出していくという体験	○		○	○	○		○	○	○	7
2	物事を多角的に見る体験	一つのモノや他者を様々な観点から観察した経験		○	○	○		○			○	5
3	協働で1つの作品を創作する体験	他者と協力し合って、一つのダンス作品を創っていくという体験				○		○	○		○	4
4	他者からフィードバックを得る体験	他者から自分の特性についてのフィードバックを得た体験			○	○		○				3
5	多様な他者と時間を過ごす体験	普通の授業では知り合えないような多様な他者と集中講義を通して時間を共にすごしたという体験						○		○		2
6	感じたことを直接表現する体験	感じた感情などを取り繕うことなくそのまま表現するという体験	○					○				2
7	まず行動してみるという体験	一見難しそうに聞こえる課題でもやってみると意外と動けるという体験			○			○				2
8	その他					○	○			○	○	4

表5 受講生が得た気づき

番号	カテゴリー	定義	a	b	c	d	e	f	g	h	i	total(人)
1	自分自身に対する気づき	将来に関する目標			○			○				2
		自分の特性	○	○	○			○	○	○	○	7
		自分の感覚				○		○	○	○		4
2	他者に対する気づき	他者の特性	○		○			○			○	4
3	他者と関わることに 対する気づき	相互作用の面白さ	○	○		○				○	○	5
		協働作業の面白さ				○			○	○		4
		場を共有することへの面白さ			○	○	○		○		○	5
4	日常生活に対する 気づき	物事を多角的に見ることの重要性		○	○	○						3
		コミュニケーションの際の観点	○		○				○			3
		非言語コミュニケーションの重要性				○	○					2
5	芸術表現に対する 気づき	感覚を直接表現することの重要性			○	○		○				
		身体表現の多様性		○		○				○		3
		声で表現することへの困難					○			○		2
		芸術表現への興味				○	○					2
		芸術表現に対する親しみやすさ			○	○						2
6	その他						○	○	○		○	4

ーションが促進された様子が示された。

4. 1. 大学における芸術教育への示唆

本研究は、先行研究や前例がほとんどない、大学における専門教育以外での芸術表現教育、特にダンス教育に対する具体的な教育プログラムとその背後にあるデザインの指針、そしてその教育効果を明らかにしたものであると言えよう。本研究では、芸術表現を創作するということがどのようなプロセスで成立しているのか、そのプロセスは活動者にどのような変化をもたらしうると考えられるのかについて理論や先行研究を整理し、そのメカニズムを考慮した上で授業をデザインしている。このように、本研究で提示した授業デザインとその教育効果は、芸術表現創作が営まれるメカニズムについて深い理論的考慮の下で想定・検討したものであり、それによって得られた上記の知見は、他の芸術表現の授業に対しても応用可能なある程度普遍性を持ったものであると考えられるだろう。

4. 2. ダンス教育への貢献

高校までのダンス教育は、創作ダンスがその教育の根幹として位置付けられ、ダンスの専門家になる・な

らないに関わらず、松本千代栄による課題解決学習という教育プログラムが開発され(例えば松本・山田[18])、中心的に実施されている。課題解決学習では、イメージ課題と運動課題という課題が教師から与えられて、そこから生徒が自由に発展させていくという手順で創作ダンスが行われている。形式的操作といった人間の発達や現在の大学教育に求められている内容(創造的思考や他者との協働)を考慮すると、抽象的思考が円滑に行えるようになり、身体的にも十分に成熟した大学生以降の教育では、(例えば高校までの学習では、きっかけとして教師から与えられていたイメージや運動自体についても自分自身で探索していくような)より抽象度の高い教育プログラムがより必要になると考えられる。本研究では、実際に外的世界との積極的な関わり合いから自分自身の表現したいイメージや身体運動そのものを探求し、作り出すことを支援した実践を行っており、現在高校までに行われている創作ダンスの枠組みを、大学生に対しても効果的に適用出来るよう、拡張した研究であると捉えることも出来るだろう。

4. 3. 今後の展開

本研究は、大学教育という、いわばフォーマルな教育における教育プログラムのデザインとその教育効果の検討を行った。今後の展開としては、もちろん、大学教育において実践を積み重ね、デザインの原則を更に精緻化させていくことが必要である。またそれに加えて、例えばワークショップや美術館での教育普及活動といったインフォーマルな教育に対しても、今回のデザインの指針に基づいたデザインを行い、その拡張可能性を検討することは十分に意義がある試みだと考えられる。こういった試みの重要性を述べる理由としては、特に自ら生涯にわたって芸術や文化に親しんでいく創造的教養[7]や 21 世紀型スキル[8]などは、大学生だけではなく、それ以降の大人にも継続的に必要とされる力であると考えられるためである。また、インフォーマルな教育の顕著な特徴の 1 つでもある「探求・発見」といった活動[19]との相性の良さも、上記の拡張を試みる理由として挙げられる。その際に、どのような実践をデザインし、その効果をどのように測定していくのかといった点は、今回の知見や受講者の特性等も考慮し、更に検討していくことが必要とされるだろう。

5. 謝辞

本研究を行うにあたってダンスアーティストの美木マサオ氏、並びにアシスタントを務めてくださった正井雪香氏、更に評定に関しまして香瑠鼓氏、C ュタツヤ氏、外山晴菜氏、に多大なご協力を賜りました。心より感謝いたします。また本研究は、文部科学省科学研究費基盤 A (24243062, 代表岡田猛)、文部科学省科学研究費若手 B (26780352, 代表清水大地) の助成を受けて行われました。

参考文献

- [1] 中野 優子・岡田猛 (2012) “即興表現を中心としたダンス授業実践とその効果—大学生の心理的変容に注目して”, 舞踊学, Vol.35, pp.53-64.
- [2] Nakano, Y., Shimizu, D., & Okada, T. (in prep) “Classroom practice and its educational effects in an improvisational dance course for undergraduates: Focusing on problem finding and communication skills”, The 31st International Congress of Psychology, Yokohama, Japan, July
- [3] Damasio, A. R. (1994) *Descartes' s Error: Emotion, Reason, and the Human Brain*, New York: Putnam Publishing (田中三彦 (訳) (2010) デカルトの誤り: 情感、理性、人間の脳, 東京: 筑摩書房.)

- [4] Bhalla, M., & Proffitt, D. R. (1999) “Visual-motor recalibration in geographical slant perception”, *Journal of Experimental Psychology: Human Perception and Performance*, Vol.25, No.4, pp.1076-1096
- [5] Vargas, M.F (1986) *LOUDER THAN WORDS –An Introduction to Nonverbal Communication*, Iowa: Iowa State University Press. (石丸正 (訳) (1987) 非言語コミュニケーション, 東京: 新潮社.)
- [6] H'Doubler, M. N. (1940). *Dance: A Creative Art Experience*, Wisconsin: The University of Wisconsin Press. (松本千代栄 (訳) (1974) . 舞踊学原論—創造的芸術経験—, 東京: 大修館書店.)
- [7] 縣 拓充・岡田 猛(2013) “創造の主体者としての市民を育む: 「創造的教養」を育成する意義とその方法”, 認知科学, Vol.20, No.1, pp.27-45.
- [8] Griffin, P., McGaw, B. & Care, E. (2012), *Assessment and Teaching of 21st Century Skills*, Dordrecht: Springer. (三宅なほみ (監訳), 益川弘如, 望月俊男 (編訳) (2014) 21 世紀型スキル—新たな学びと評価のかたち, 京都: 北大路書房)
- [9] 岡田 猛 (2014) “「芸術を専攻しない大学生」のための芸術実践授業の意義-序に代えて”, 小澤 基弘・岡田 猛 (編著) 探る表現-東大生のドローイングからみえてくる創造性, pp.1-10. 京都: あいり出版.
- [10] Hanna, J. L. (2008) “A Nonverbal Language for Imagining and Learning: Dance Education in K-12 Curriculum”, *Educational Researcher*, Vol.37, No.8, pp.491-506.
- [11] 岡田猛 (2013) “芸術表現の捉え方についての一考察: 「芸術の認知科学」特集号の序に代えて”, 認知科学, Vol.20, No.1, pp.10-18.
- [12] Nakano, Y., & Okada, T. (2012) “Process of Improvisational Contemporary Dance”, *Proceedings of the 34th Annual Meeting of the Cognitive Science Society*, Sapporo, Japan. pp.2073-2078.
- [13] 中野優子・岡田猛 (2015) “コンテンポラリーダンスにおける振付プロセスの解明”, 舞踊学, Vol.38, pp.43-55.
- [14] Collins, A (1992). “Toward a design science of education”, In E.Scanlon & T. O'Shea(Eds.), *New direction in educational technology*, New York: Springer-Verlag. pp.15-22.
- [15] 中野優子・岡田猛 (2016) “駒場博物館ダンスワークショップ「博物館で踊ろう! からだで鑑賞?」の実践とその効果”, 中小路久美代, 新藤浩伸, 山本恭裕, 岡田猛 (編著) 触発するミュージアム—文化的公共空間の新たな可能性を求めて—, pp.149-162. 京都: あいり出版
- [16] 香瑠鼓 (2012) 脳とココロとカラダが変わる 瞬感動∞ワークショップ, 東京: 高陵社書店
- [17] 豊田秀樹 (編著) (2009) 検定力分析入門-R で学ぶ最新データ解析—, 東京: 東京図書.
- [18] 松本千代栄・山田敦子 (1982) “舞踊課題と創作学習モデル—高等学校における実験授業研究—”, 日本女子体育連盟紀要, Vol.81, pp.1-40.
- [19] Crowley, K., Pierroux, P., & Knutson, K. (2014) “Informal Learning in Museums”, In R.K.Sawyer (Eds.), *The Cambridge Handbook of the Learning Sciences*(2nd Edition), New York: Cambridge University Press. pp.461-478.